

の行為も周溝中層の埋没後に挙行されたもので、その時、すでに埋没下の「段」、「台」、「掘り込み」等に因果関係を求めるには不利で、それより、いとも簡単に埋没を許し、また、それを待っていたかのように開始される各種の祭祀行為をみる時、「掘った土を盛って」残る痕跡にまで及ぶ意義の追求がなくとも、「溝内祭祀」に対する関心の度合は充分に知れる。しかし、その行為の挙行を「人為的な埋めもどし」で対処するのは、「関東地方の方形周溝墓は溝による区画が第一義である。」から逸脱しかねないし、「土器の出土状況も多様で一定の規則性は看取できない（注、以上8b）。」ような、依然と続く暗中模索のなかで、空間的な精神行動の実体を痕跡として規則性まで求めるにはいまだに限界があり、唯一、呈示される事実は周溝内壁が描出する「形」へのこだわりであろう。

前方後方型周溝墓の「形と存在」

こうして、弥生時代の伝統的な墓制の形となった「方」形は、その最終段階をむかえて「前方後方」形を加えることは周知される。そして、ここで「前方後方型周溝墓」の所以たる、方形周溝墓に付された「前方部」に注がれる視点は、先ず、「地上と天界とを結ぶ通廊（注14）」にその起因を求めて、周溝の断絶箇所を抽出することから始め、「使用した資料の大半は、墳丘を失った小規模な古墳が多い（方形周溝墓も含む、注15）」という不利な条件にありながら、前辺中央断絶例の「開口型」から「前方後方型」の集成が精力的に行われ、分類、系列化が計られていく、いわゆる田中分類がされる。—そして、このあたりから観察の視点が周溝内壁で描出される「前方後方」形に移って、方形周溝墓にみせた周溝内面への執着が薄れていくのも致し方ないことである。—それから、さらにこれを助勢して「方形周溝墓の一辺の中央に通路をつくって、それがだんだん発達し、やがてここは通路ではない、通るなということで、張り出しを大きくして、そこにもたくさん土を盛って入ってこられないようにするという流れがあるようです（注16）。」と、前方後円墳の「前方部は後円部に至る通路である解釈（注17）」のひとつに協調して、これを先導していくのである。しかし、前方後円墳の起源論にも「これという方向性を見いだしかねているのが現状である（注18）」ように、「通路」に関しては、占地、ならびに保存条件でいかようにも変化してなる「周溝の遺存の有り方」に散漫的であった従来の平面的な発掘調査の「産物」、つまり、それが「陸橋、ブリッジ」状と表現した、方形周溝墓の内と外を同一面でつなぐ周溝の断絶箇所を指しているならば、定型化された「前方後方型周溝墓」にも同様の箇所は認められるし、さらに、今日の造墓当初より「立体的」な方形周溝墓では、なお、説明不足は至めず、依然としてその発生の「継起」は模倣したまま今日に至っている、とするのが妥当であろう。

また、この時すでに具現化された前方後方型周溝墓を見据えて、「東国の前方後方墳の分布する地域には東海系土器を出土する遺跡が多く、実際に東海系土器を出土する前方後方墳が多い。これらを総体的に、そして古墳時代初頭の政治状況を考えた時、前方後方墳は東海地方西部を中心とする地域から派遣された将軍の墓とするのが妥当であり、前方後方型周溝墓は在地

化した兵士や農民によって造営されたものとする（注19）。』と、在野の具体相まで語られるに至り、その淵源地では「この時期（S字甕B類）人々は漂泊し、東国へ広く濃美平野の土器が拡散する。そして、それは従来までにないより広い地域との関係、どのような集団、体制とも結合できるし、その成立には包摂的な従属関係を見る必要はない（注20）。』と、性急な結論の引き出しを和らげながら、その発見を近い将来に見透していたのである。

そして、濃美平野に廻間様式の開始とともに造墓される、愛知県清洲町廻間遺跡の「前方後方型墳丘墓」S Z 01や、小規模で集団化する同土田遺跡の「方形開口型」の墳丘墓をみる時（注21）、この従来より段階的な発展過程として捉えられていた造墓変遷（田中分類）が、廻間Ⅰ式前半期のなかで予想以上の速度で完成していて、その速度に廻間、土田遺跡を縦列するには窮屈で、むしろ横列的な配置をもって、そこに指導者達と集落構成内の小単位集団別の、つまり「階層別の造営地」の存在を位置付け、さらに廻間S Z 01の墓前祭のあり方から、廻間Ⅰ式期に継続してⅡ式期中断、改めてⅢ式期に急きょとり行われて遺跡の終焉をむかえる「祭祀の継続から断続と断絶」を実証するのである。そして、その祭場が造墓時の墓外から、終焉に至る時、すでに埋没中の周溝内（溝内土壙、礫床の追従埋葬も含む）から、墓内に移動する過程に、通路の必然性はないことを知らされるのである。

こうして、濃美平野で廻間S Z 01の墓前祭が断続している時、つまり廻間Ⅱ式期にここを淵源地として土器が東日本をはじめ、外縁各地にむけて移動を開始する「第1次拡散期」をむかえ、この動向が、地理、ならびに人文環境とも直接的な距離関係にある本地域の、典型的な「在地」然として経営される一連の遺跡に及んで、そのひとつである本遺跡に「造営地」を求めて、前方後方型周溝墓、方形周溝墓、さらに、この祭祀を司る竪穴住居跡02の創立をみるのである。ここで、この丸ヶ谷戸の地が「指導者達の墓域」に選抜された理由を知る由はないが、既存の竪穴住居跡01にみせる撤退のあとが、およそ交戦的な痕跡のない、余裕ある片付けのもとに「納得された行為」である時、おそらくこれが属した小単位集団から集落全体にまで及ぶ移住を促すことのできる背景には、「どのような集団、体制とも結合できる」、外来系土器と在来系土器の融合の表出そのものであり、外来系土器に占める微かな畿内や、北陸から中部高地の土器の混在は第1次拡散期における「各々の外、在来の融合」の集合も意味して、この土器の移動と集合に置き換えられる「人間の集散（注22）」による集合体の丸ヶ谷戸遺跡における「廻間S Z 01の範型」の作出にはどこにも包摂的な従属関係はみあたらないのである。

それから、この頃になると濃美平野ではさらに巨大な墳墓の出現によって、前述の階層別造営地の関係が、より高度に象徴化された造営地と伝統的な造営形態が残っていく、両極化現象が捉えられ、もし、この巨大な墳墓を前方後円形を呈した「纏向石塚」に指し、その発生を契機にして、濃美平野に「前方後方墳」の出現を示唆しているならば、廻間Ⅱ式後半からⅢ式期に至る「第2次拡散期」に付帯する「畿内の情報」として、その底辺の諸々の情報まで秘めて、

先発のそれよりは確実にひとつ増えていったはずである。そして、この距離的な時間差を除々に
つめながら、一この情報が先発にたどる道程でみせる中継の様相はそれぞれに詳しいが一、こ
れが関東平野をこえて福島県宮東、男壇遺跡（注23）にたどり着いた時には、すでに波長をな
くした多重な情報だけが「一面化」した姿をみせるのであろう。

つまり、淵源地の濃美平野より常に「一波、万波を呼ぶ」堰堤状に位置する駿河湾奥部沿岸
地方に先ず、前方後方型周溝墓を創立し、大廓式土器を成立させる、伝統的な「前方後方」形
の系譜の定着は、4世紀後半に至って、より高度に象徴化された前方後方墳、富士市浅間古墳
（全長100m）を誕生させ、着実にその動向を反影させていくのである。しかし、この後、5
世紀初頭に同東坂古墳（全長60m）の前方後円墳の出現以来（注24）、その復活はないように、
この一世代限りの前方後方墳の造墓こそが、土器の拡散以来、東国にむけて一歩先んじて情報
を提供してきた濃美平野の「文化」の定着と伝統の最終的な主張であり、その時以来、何時も
一歩、背後に潜んでいた畿内の影響（前方後円系）がある時点をもって強大な「政治」的勢力
と化した時、それらに覆い被さっていく姿を「前方後方」形の伝統のない静岡平野の谷津山古
墳（全長110m）の創立で知り、そして、この状況が外縁に投影されているはずである。

注1. 富士宮市教育委員会 1981「南部谷戸遺跡」『月の輪遺跡群』

〃 1983『滝戸遺跡』第Ⅳ次概報

沼津市教育委員会 1978『二本松遺跡』

〃 1970『目黒身』

韭山町役場 1980「田方郡韭山町奈古谷遺跡、同神崎遺跡」『韭山町史』第Ⅱ巻

注2. 瓜生堂遺跡調査会 1981『瓜生堂遺跡』Ⅲ

注3. 石川治夫 1983「沼津市尾上Ⅲ橋遺跡発掘調査略報」『駿豆考古』第24号

注4. 山岸良二 1981『方形周溝墓』考古学ライブラリー8 ニューサイエンス社

注5. 松本完 1984「横浜市道高速2号線埋蔵文化財調査報告書No6 遺跡一Ⅳ 1983年度」
同発掘調査団

注6. 「台」をもった方形周溝墓の「呼称」については本紙掲載参考文献にて詳細に紹介さ
れており、また、そのことを目的としていないので、それらを参照していただきたい。

注7. 桑原隆博 1989「周溝墓」『考古学ジャーナル3』No302 ニューサイエンス社

注8 a. 一瀬和夫 1985「方形周溝墓・方形台状墓 そして古墳」『末永先生米壽記念獻呈
論文集』

8 b. 伊藤敏行 1986、1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究」Ⅰ・Ⅱ『東京
都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅳ・Ⅵ

注9. 大場磐雄 1973『宇津木遺跡とその周辺』中央高速道八王子地区遺跡調査団

注10. (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989『川合遺跡（遺構編）』

注11. (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989『能島遺跡（本文編）』

注12. 佐藤由紀男 1990「遠江」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』第7回東海埋
蔵文化財研究会

注13. 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化
財調査報告Ⅴ

- 注14. 大塚初重 1985「東国古墳発生論」『論集 日本原史』論集日本原史刊行会編
- 注15. 田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号早稲田大学考古学会
- 注16. 石野博信 1986「古墳の出現」『東アジアの古代文化』48号 大和書房
- 注17. 石野博信 白石太一郎1986「対論出現期の古墳をめぐって」『東アジアの古代文化』4
8号大和書房
- 注18. 岩崎卓也 1990『古墳の時代』教育社
- 注19. 高橋一夫 1985「前方後方墳の性格」『土曜考古』第10号 土曜考古学研究会
- 注20. 赤塚次郎 1988「東海の前方後方墳」『古代』第86号 早稲田大学考古学会
- 注21. 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 注22. 岩崎卓也 1984「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学Ⅲ』長野県考古学会
- 注23. 和田 聡 1990「会津坂下町宮東、中西、男壇遺跡略報」『第32回福島県考古学会大
会発表要旨』
- 注24. 植松章八 1988「駿河、伊豆における大型・古式古墳とその地域性をめぐって」『考
古学叢考』下巻 吉川弘文館

(馬飼野行雄)